

---

# 勇者がこちらの世界に飛ばされました。

あかさはまな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者がこちらの世界に飛ばされました。

### 【Nコード】

N7531U

### 【作者名】

あかさたはまな

### 【あらすじ】

勇者リユート、剣士で姉のアスカ、魔法使いで妹のサーラがこちらの世界（現代社会）に飛んできてしまった！ 勇者はどうか元の世界に戻る為に奮闘する……横で、姉と妹はいかにしてリユートを誘惑出来るか死力を尽くしているラブコメファンタジー。

エクスカリバー！

「エクス、カリバーーーーーーッ！！！」

ザワッ！！

部屋中の空気が震えた。

場の膠着状態を打開するべく少年はそう大声で叫んだのだ。

少年は剣にありつたけの魔力を込め、最後の切り札を使おうとしている。

彼の周りに風が吹き始めた。……っ！　すごい風だ！！

その台風のように荒れ狂う風が更に強くなり、暴風雨の中心にいる少年の姿は、もう見えなくなっていた。

周りにいる仲間も、自分が吹き飛ばされないように必死で態勢を低くしており、動くことすら適わない状況だ。

嵐みたいに吹きすさんでいた風が吸い込まれるかのように一点に、少年の持つ剣先に集まり出した。

それと同時に、とてつもなく眩しい光が剣の先から輝き始める！少年はその目も開けられないくらいに光り輝く剣を相手に向けて勢いよく放った！！

「くらえーーーーっ！！」

雷光と化した光が稲妻となって一直線に相手の喉元めがけて駆けていく！

相手は……避けようとしていない。

いや、避ける場所がないのだ。

少年の全ての魔力を振り絞った全身全霊を込めた一撃が、文字通

り光の速さで相手に襲い掛かる！

ズシャー……ッ！！

光の軌跡に沿って地面が傷つき盛り上がっていく。もの凄い威力を秘めている……！

少年はここにきて自らの限界を超える力を引き出したのだ。

これを喰らうとなると相手も無事で済むはずがなからう。

だがしかし、相手はなんら慌てず冷静にその軌道を見極めようと目を細めていた。

どうやら向こうは最初から避けようとせず、獰猛な野獣のように迫り来る光を真っ向から受けるつもりの方だった。

ザシュー……ッ！！

光が爆ぜる。

辺り一面が真っ白になり何も見えなくなった。

少年の剣から発せられた光は全ての魔を消し去る聖なる力を宿している。

魔族であれば塵一つ残さずにこの世から消える代物だ。

「ぐはつつつつ……!?」

それを相手はまともにくらう。

無謀にも程がある。

なにせ、今までこの切り札を受けて生き残ったものはいないのだから。

そして今回、少年の限界を超えた、今までの中で一番力のこもった一撃なのだ。無事で済むはずがない。

……………だが、しかし。

今、対峙している相手は一見すると小さな女の子のようだが、高貴な魔族の証でもある紫の体と羊のように伸びている悪魔の角を頭に有している。

それに額に埋められている宝石のように輝くマナ。

それは全魔族を束ねている『魔王』の証だった。

魔王相手に使うのは、もちろんこれが初めてだ。なので、今回ばかりはどうなるかわからない。

（頼む！ これで決着がついてくれっ！！）

周りにいるみんなは神に祈るかのような、そして悲哀に満ちた面持ちで魔王の動向を見守っている。

そんな中、

ばさっ……

と音を立てて、全ての力を使い果たした少年、『勇者』が地面へと崩れ去った。

聖剣をくらった魔王がどうなったのか確認出来ないままに。

## 決戦・死闘

ここは魔王城。

その最奥、魔王の部屋で勇者達と魔王が死闘を繰り広げていた。  
『繰り広げていた』と言うのは、今、部屋中が煙に包まれ何も見えない状態なので誰も動く事が出来ないからだ。

今の内に体勢や陣形を整えるのが得策なのだろうが、みんな魔王の行方が気になっており微動だにしない。

これで魔王が地面に伏していれば全てが終わる。

「……やったのか？」

さっきまで気絶していたであろう、突っ伏すように倒れていた勇者が、剣を杖にしてどうにか立ち上がりそうつぶやいた。

けれど、依然として部屋中の煙は舞いあがっており、その中心にいる魔王は……まだ見えない。

（一体、魔王はどうなっているんだ）

場にいる全員、気を急いでいる。

その中の1人、自分の身長とそう変わらない大きな剣を手に携え純白に近い金髪をなびかせている、

見た目麗しい少女、おそらく戦士か剣士だろう、が誰よりも早く魔王の姿を捉えた。

「いや、まだまだ！ まだ生きている！」

その言葉と共に少しずつ煙が晴れ、辺りが見え始めた。

そして、ようやく他の2人も魔王の姿を目視する事が出来た。

……魔王は、生きていた。

絶対を誇る、勇者のエクスカリバーを食らってもなお、不敵に笑みを浮かべている魔王。

なんという事だ！ あの必殺の一撃を真正面から受けたはずなのに！？

皆が信じられないという顔をしているさなか、魔王が勇者に向けて喋りだす。

「ふ、ふふ……。さ、流石の我也、今は少し、効いたな。……だが、なに。気にするほどでもない」

何事もなかったかのような風を装っているが、やはり、かなりダメージを受けているようだ。

今までの戦いの中で見た事もない位に、苦しげな表情を浮かべていた。

その様子を見て、先ほどの女剣士が魔王に話しかける。

「魔王。減らず口を叩いているようだが、頭から血を流し、片ひざをついている状態では、やせ我慢としか見えないがな」

その言葉を聞いた魔王は、くくく、と笑いはじめた。

「ふふふふ。あはははははは！ あーはっはっはっはっは！……

……ああ、そうじゃ。認めようぞ。

我は今の一撃で力が元の半分も出せなくなってしまった。

しかし、おぬしらも我と同じように、既に満身創痍のようだが……

……違うか？」

「……………くっ！」

事実、勇者は、さっきの一撃でほぼ全ての魔力を使い果たしており、女剣士は2人を守るのに精一杯で全身傷だらけ、

そして後ろのほうで、端正な顔と長い黒髪を隠すかのようにロブを羽織っている少女、

多分、魔法使いであろう、に至っては、床にへたり込んでいて、喋る気力さえも残っていなかった。

.....。

全員が動けない。否、動くことが出来ない。

迂闊に動くと自らの死につながるからだ。

膠着状態が続く。事態は勇者が切り札を放つ前と同じような状態に戻っていた。



進むか、引くか

進むか、引くか

魔王を含む4人全員が、自分の残された力と相手の力を天秤にかけている。

この判断を間違えてしまうと自身の命を失う事になるからだ。誰もが慎重にならざるおえない。

極限での緊張状態が続き、立っているだけでも神経が磨り減っていく。

女剣士の口から漏れる息も荒く顔も苦しげなのを隠そうとしていない。

勇者達の額から汗が滴り、地面へと落ちる。

そして玉のような滴が何粒かこぼれた時、しびれを切らしたのだろうか、

勇者の胸に飾ってあるペンダント、赤く輝く聖石『イーシャ』から声が聞こえてきた。

「みなさん！ これ以上は危険です！！ このままだと誰か、いえ、最悪の場合、3人とも死んでしまいます！

私にはずっと旅をしてきた親友を失ってまでも、魔王を倒す必要を感じられません！

ここは一旦私の魔法で城へと戻り体制を整えましょう！」

緊迫感のある声だけれど、場の雰囲気こそぐわなない可愛らしい声だった。

けれど、その可愛らしい声に似合わず、筋が通っていて自分の思いを込めたはつきりとした意見だ。

多分、これが一番いい選択なのだろう。

勇者もその意見に賛同した方がいいと心ではわかっているつもりなのだが……

しかし、ここまで来れたのは度重なる偶然と、2度も訪れないであろう幸運に助けられた部分が大半を占めていたのだ。

とても次があるとはとても思えない。

しかも、既に魔王に自身の必殺技であった『エクスカリバー』という切り札を見せてしまっている。

このまま魔王を倒さずに逃げる、という事は、最大のチャンスをも逃してしまうのに等しい。

それはあまりにも惜しい選択だ。

くっ、どうする！？ どうすればいいんだ！？

そんな未だに結論を出せないでいる勇者の代わりに、檄を飛ばすかのような声を上げるものがいた。

「大丈夫、大丈夫だっ！ このままいけば、私たちは勝てる！」

……2人とも、今まで私が言った通りにならなかった事があるか？」

女剣士はイーシャの言った一番いいであろう意見を切り捨てたのだ。

しかし、自暴自棄になっているわけではなかった。

ニカツ！ と全身傷だらけなんてなんでもない、というように口

角を上げて笑顔を作っている。

女剣士の顔が勇者と魔法使いの不安を一掃した。

2人にまた立ち上がる、魔王に対抗する勇気が湧きあがったのだ。その顔を見て女剣士はまたいつもの、いや、いつも以上にキリツ、とした顔になり、

「魔王もかなり苦しいはずだ！ もう一度みなのを合わせれば、必ず魔王を倒す事が出来る！！」

2人とも、もう少しの辛抱だ！ ……行くぞ！ 私の後につけ！」  
勇猛果敢に巨大な剣を構えて魔王へと突進していった。

ブウンッ！！

女剣士の振るう剣の軌道は斧のような豪快な音を立てて、しかし槍のように魔王の急所を的確に捉えていた。

魔王は、くっ！ と顔を歪ませ、女剣士の攻撃を避けるのみ。

……っ！！ 反撃をしてこない！！

やはり、さっきの一撃は相当効いていたようだ！！

それを見て、勇者も動かない体を無理やりにもムチを打ち加勢する。

さっきまで立つ事すら出来なかった女魔法使いも立ち上がり、魔法で2人を援護し始めた。

女剣士の魔法はからっきしだけれども、ここにきて『希望』という大きな魔法をみんなにかけたようだ。

（（この勝負、勝てる！！））

3人とも俄然、勢いづく！

『魔王を倒す』と言うゴールはもう手に届くところにある！ ゴー

ルまであと少しだ！！

その思いが3人の力を奮い立たせていた。

一方、バリアも魔法も使わない、いや使えない魔王は、3人の途切れることのない波状攻撃を凌ぐだけで精一杯のようだった。

さっきまでの余裕はなりを潜めており、苦悶の表情を浮かべている。

遠くから魔法使いの撃ってくる魔法の矢に気を取られ、女剣士の剣先が魔王の顔に、体にかすり始めていた。

このまま行けば、遠からず致命傷を負う事になるだろう。

（くそおおおお！　こんなはずは、こんなはずでは！　……認めぬ。認めぬぞ！！）

徐々に押され防戦一方の魔王は、現状を打破すべく部屋中が震動する程の大きな声で吼えた！

「我は負けぬっ！！　負ける訳にはいかぬのじゃっつ！！！！！！」

## 窮地

その瞬間、目を開く事も敵わない程のまばゆいばかりの光が部屋中を覆った。

ぐっ！？ 眩しい！！

目がつぶされないように3人ともとつさに防いだのだが、それと共に勇者の頭には疑問符がよぎった。

（闇魔法の術師である魔王がなぜわざわざ光魔法を！！？ ……いや、今のはただの目くらましだ！！）

「『姉さん』！ 『サーラ』！ これは<sup>ブラフ</sup>罠！ 目的は他にあるはず！ 気をつける！」

勇者の言葉で『女剣士のアスカ』と『妹の魔法使い』がすぐさま体勢を戻した。

魔王は……………いた！

なんと、背を向けて逃げている！

どうやら魔王もなりふり構わずに必死になっているようだ。それだけ今の状況が危ういのだろう。

だが、まずい！ 援軍を出されると勝てる見込みがなくなってしまう！

早い所、決着をつけなければ！

奥の部屋に逃げ込んだ魔王をすぐさま追いかける3人。

よしっ！ 確かそこは行き止まりだ！ 自分から窮地に追い込むとは！

……いや、まてよ？

なんともいえぬ違和感が勇者の頭の端をかすめた。

魔王は通路側に行けたはずなのになぜそちらへは逃げ込まず、わざわざ行き止まりである奥の部屋に逃げ込んだんだ？

おかしい？　もしかして、まだ何かあるのか？

魔王の不可思議な行動に少し迷いが生じてしまう勇者。

けれど、すぐさま、

（迷ってる場合じゃない！！　何か秘策があれば、もっと早い段階で出しているはずだ！

死にそうになるまで隠すメリットなんてどこにもない！）

そう思い直し、奥の間へと走り出した。

勇者が魔王の逃げ込んだ部屋の前に来た時には、女剣士、勇者の姉、アスカが一足早く部屋に足を踏み入れてようとしていた所だった。

アスカが後ろを振り返り、いつも通り部屋に入る前に2人へと指示を出す。

「私がまず部屋に突入する。『リユート』は後ろにつけ！　例え畏だとしても私に構うな！　目標は魔王を倒す事のみ！

サーラは援護、それと部屋に異変がないかの解析を頼む。了解しだい私が扉をけやぶって突入する！」

「了解！」

ドンッ！！

勢いよく荘厳な扉を粉碎したアス力がさきがけとして部屋に入り、奇襲がないのを確認してから部屋に突入する2人。

開け放たれた部屋の中には……目もくらむような部屋中に光り輝く金貨や希少な宝石、見た事もない置物、そして様々な大きさの宝箱が埋め尽くされていた。

こんな規模の宝部屋なんて旅をしてきた途中に出会った大盗賊を捕らえた時ですらお目にかからなかったのに……すごい。

3人とも思わず元の目的を忘れてその絢爛な宝たちに魅入ってしまふ。

！！ 魔王はどこだ！？

慌てて部屋を見回すリユート達。

元はかなり広い部屋だったろうが、今は部屋の大半を大量のに占領されているので人の動けるスペースはあまりない。

故に、魔王を見つける事がすぐに出来た。

……いや、最初から隠れてなどいなかった。

まるで、おびき寄せていたかのように悠然とこちらを向いていた魔王。

わき腹から止めどなく血が流れているにもかかわらず、腕を組んで尊大に佇んでいる。

満身創痍なのに目には光を宿していた。まだ諦めてはいない。

どうやら、この部屋には何かあるようだ。

そう思いみな警戒したのだが、部屋の解析が終わった妹が、グリーン、つまり罠がない、という合図を出した。

という事は……部屋には何も仕掛けていない。

どういう事だ？ いったい、魔王は何を考えている？

重傷な状態で敵に囲まれているはずなのになぜそんなに余裕があるのだろうか？

そんな疑問を払拭するべく姉が1歩前に出て、底の知れない魔王に剣先を向けた。

「どうした魔王？ もう鬼ごっこは終わりなのか？ それとも、ここに絶体絶命の状況をひっくり返す程の秘策か何かがあるのか？」

「ふふっ、まあそう言ったところだ……」

アスカの質問を曖昧にはぐらかす魔王。

ニタリと、八重歯を見せて口だけで笑っている。

「姉さん。時間稼ぎをしている可能性があるわ。早く決着をつけましょう！」

サーラがアスカに忠告する。

そういえばサーラがこの戦闘中、久しぶりに口を開いたな。だいたい体力が回復してきているようだ。

そんな妹の忠告に対して、姉のかわりに魔王が口を開いた。

「ふん、我がそのような姑息な手を使うと思っているのか？ ……ふふっ、いや、そうかもしれないな。まさか、これを使う事になるとはな……」



魔王は自嘲気味に笑い、うずたかく積み残されている宝の中でも特別に鎮座されていた、他の宝箱よりも一回り小さい小箱を開いた。そこから取り出しされたのは、キラキラと輝く水晶のような美しい1つの玉。

「……これは使いたくなかったのじゃが……」  
と小さくつぶやく魔王。

そんなに危険なものなのだろうか？

リユートは自分の知っている限りの知識と記憶を走らせてみたけれども、神話や吟遊詩人の話にもこのような水晶は出てこなかった。ちらりと他の2名を見やるが、兩人とも軽く首を振るのみ。

どうやらあの妹ですら知らないようだ。

一体、あれはなんだ？

キラキラと光輝くそれも何の力を秘めているのかわからないので不気味に見えてしまう。

くっ、また事態が膠着してしまう！

気の焦るリユートが歯ぎしりをしたその時、

「ああ！！？　そ、それは！！？」

と、驚きの声を上げたものがいた。

## 決着

先ほど、必死に勇者たちを説得していたイーシェだった。

いきなり胸元近くで大声を出されておもわず驚いてしまうのだが、それよりもイーシェが口に使っていた事が気になった。

どうやらリュートの胸に飾られているイーシェは、この水晶の事を知っているようだ。

「イーシェ！ この水晶を知っているのか！？」

「はい！ 確かあれは……うーん、えーっと、なんていえば……」

なぜか口をもごもごと、歯切れの悪い声を出すイーシェ。

「なんなの？ 早く教えてちょうだい」

妹がイーシェを急かす。

「えーっと、うんと、どう言おうかな……あつ、そうだ！ あれは、

精神を喰らう、魔水晶です！ そういう感じです！」

興奮した面持ち（顔は見えないが）で話すイーシェ。

精神を喰らう？ 一体、どういう事だ？

「ほう。知っているとはな。石風情が」

魔王が興味深げに耳を傾けてきた。

どうやら、話を聞く機会を与えてくれたようだ。

「どんな道具なんだ？ 教えてくれ」

と、少し急かすように自分の胸に語りかける。

「ええーっと、その、私も、き、聞いただけで、実際は知らないんだけどね！ 確かー、言い伝えでは、

あれを壊すと中から世にも恐ろしいものが溢れるんです。

それを見たものは精神が破壊されて……発狂したようになり、

ずっつと泣き叫んで、どこの言葉かもわからない呪いの言葉をずっつとつぶやき続けます。

その後は、寝る事と食べる事しか出来ない状態になるという、  
目にした者、全員の『元の人格』を喰ってしまうという恐ろしい  
水晶なんです。

ああ！ 思い出しただけでも寒気が！ …… もうないと思ってた  
のに、なんであるんだろう……

って、あれ？ でも、確かあれは天界で厳重に保管されていたは  
ず……。

なぜそのような恐ろしい物をあなたが持っているのです！？」

長々としたイーシェの説明を聞き終えると同時に、魔王が笑い出  
した。

「ふふふ。わざわざ説明するとは！ 我も天界で厳重に保管されて  
いた、とは聞いておったが、『危ない時に使え』としか言われなか  
ったからな。

どう使えばいいかわからなかったのだが…… それではさっそく使  
わせてもらおうか！」

なっ、一杯食わされた！？

「くっ！！」

アス力が水晶を奪おうと走り出すが、到底間に合いそうにない。  
それよりも早く魔王が動く。

「甘いっ！！」

水晶を握る手に力を込める魔王。そしてピシッ！ とヒビが入っ  
た所で、なんと、リユートめがけて水晶を投げてきた！！

「なっ！！？」

「リユート！？」「兄さん！！？」

とつさに2人がこちらに駆け寄ってきてくれたが、無常にもリュ  
ートの目の前でパリンと割れる水晶。

その瞬間、あたりはすごい光に包まれた！ 眩し過ぎて眼球に痛みを感じる程だ！

それに加え何か空間が歪むような不思議な感覚に襲われた。

……うっ、頭がクラクラしてきた。いや、それよりも他の2人は大丈夫なのだろうか？

「くっ……姉さん、サーラ！ どこにいるんだ！？」

「リユート……サーラ……だい、じょうぶ、か？ ……私、は……」  
「うっ、兄さん、姉さん……あた、まが……思考が……はつき、り、し、ない……の」

ひどい2日酔いのような胡乱な頭を支えるのに必死になっていたら、ドサツ、ドサツと倒れる音がどこか遠くの方で聞こえたような気がした。

姉と妹なのか確認したいけれども、先程からチカチカと視界にノイズが入り始めてあるはずの地面すら見えていない。

意識が朦朧とし、思考もはつきりしない事はわかっていて、そこからどうすれば回復すればいいのかわからない。

（俺はどうなってしまうのか？ イーシェの言っていた事が本当なら……）

どうにか平静を保とうとするが、しかし最終的にリユートも他の2人と同じく平衡感覚を失い、倒れてしまった。

もう、これが夢か現実かもあやふやで、妖精の村にある夢幻花を嗅いでしまったかのように錯乱してしまっている。

目を開ける事も適わない。

（く、そ……あと、もう少し、だっていう、の、に……）

なんとか立ち上がろうと腕に力を入れようとしますが、それも叶わず……意識が遠のいていき……

そうして世界が、飛んだ。

## 見知らぬ世界

「…………お…………きて…………ちこく…………」

ユサユサ。ユサユサ。

「う…………ん…………？」

何かに体を揺れ動かされて、リユートはぼんやりと目を覚ました。頭はまだぼーっとしていて意識もはつきりしない。

なにやらさつきからずっと体をユサユサと揺さぶられているようだ。

ついでに誰かの声が聞こえる。

誰かが自分に向かって声をかけていたらしい。

「…………ねえ…………流ちゃん…………きて…………遅刻…………しちやよ！…………もう、流ちゃんったらー！」

まだ頭がはつきりしていないのか途切れ途切れに聞こえる声に耳をすませつつ、少しずつ頭を覚醒させていく。

えーっとな…………俺は、確か…………魔王と戦っていて、それで…………

（パリーーンッー！！）

！

（姉さん、サーラー！！）

!!

(ドサツ)

!!!

そうだっ！ 確か水晶が壊れたんだ！ それで光に包まれて……  
その先は覚えてない！

「姉さん！ サーラっ！」

ガバッ！！

大声で叫び、慌てて体を起こす！

「キャッ！？」

「ん？」

目の前には見知らぬ少女がいた。リユートの大声に驚いている。  
「流ちゃん？ どうしたの？ 何か変な夢でも見たの？ ?? お  
ーい？」

目の前で手を振る少女。

さっきまでリユートに呼び掛けていた子なのだろう。

しかし……なんというか……多分、喋りかけられているんだろう  
が、何を言っているのかわからない。

どこの国の言葉だろうか？ 少しの聞き覚えもない。  
(なんだここは？ この少女は誰だ？)

左右を見渡して見るけれど、ここの記憶は……ない。

見た事もない部屋だ。

今だに手を振る少女を尻目に、顔に手を当てもう一度、何が起きたのかを考え始める。

（一体、何が起きたんだ？ 魔王と戦って、水晶が割れて……そう  
だ！ 姉や妹の事を考えてたんだ）

リユートが姉と妹の安否を気にし、急いでベットから立ち上がる  
うとした瞬間、

バンッ！！！！

扉がこれ以上ない位に壊れそうな勢いで開いた。というより壊れた。

木製の扉を蹴破ったのは、姉さん……のようだった。

『ようだった』というのは、姉の特徴でもある片方がとても綺麗な  
灼眼、オッドアイではなくっており両目とも綺麗な漆黒だったの  
と、

今まで姉の性格上、絶対に着そうにない可愛らしい柄の寝間着を  
身に着けていた。

なにより……今気づいたけれど、昨日の夜にはなかったありえな  
い程の大きな、その、む、胸が服の下からでもわかるくらいに強調  
されていたからだ。

「リユート！ 居たっ！ よかった！ 心配したんだから！！」

姉は弟の姿を確認するや否や、いきなりリユートめがけて飛び込  
んできた。



ギユウッ！！！！

グエッ！！？

心配していた度合いを表すかのように姉が、きつく、きつく抱きしめてくるのだが、

く、苦しい！ 出会って早々にお別れしてしまう！

「う、うぶっ！ 姉さん……く、くるし……！？」

きつく抱きしめられていたのもそうだが、別の理由も合わせて息が出来なかった。

何度も姉に、息の出来ない箇所をタップをする。

そのおかげなのか、力加減を忘れていた姉が、もうちょっとで弟殺しの殺人犯になりそうな事に気付いてくれたようだ。

「はっ！ すまない。思わず……少し取り乱してしまったようだ」

ぱっ、と歌舞伎顔をした相撲取りも真っ青な、さば折りをやめて体を離してくれた。

ふう……生き返った……。

やっとこさ、姉の呪縛から解放され、不足気味だった酸素を胸いっぱい吸い込む。

（……しかし、今までになかった、新鮮で幸せな感触だったなあ。なので、その、きつくしなかったのなら、今度はこちらからお願いしたいような……

あ、なんだか理由はわからないけど、無性にプリンが食べたくなくなってきた。なんでだろうか？）

そんなバカな事を考え、顔がニヤけるけれども、すぐさま元のシユツとした顔に戻した。こんな事にうつつを抜かしている場合ではないのだ。

ふと横から視線を感じたので、その視線の先を辿ってみる……と、さつき起こしてくれた女の子が口を開けてポカーンとしていた。

アスカも、ようやくその子がいる事に気付き、リユートに耳打ちをしてくる。

「この子は？」

知らない。と首を横に振る。

「ふむ。もしかして、倒れていた私たちを拾って助けてくれたとか？  
ならば、お礼を言わなくてはな……いや、私たちは魔王城で戦っていたはずだ。

という事は、私たちを助けられるはずがない。……っ！？  
となると敵か……？」

途端に顔つきが厳しくなる姉。

すぐさま戦闘状態に入りだした。

一方、女の子の方かというと、急に部屋に入ってきた姉の表情がコロコロと変わる事にただ目を白黒させているばかりで、全く状況を把握していそうになかった。

この子は雰囲気からして敵じゃない！！

「姉さん！！ その子は！」

アスカを止めようと声を出した瞬間、開けっ放しの扉の向こうから聞きなれた声が聞こえてきた。

「その子は、敵ではないわ。お姉さん」

遅れてきた真打ちのように腕を組みながら部屋に入ってくる妹。  
よかった！ サーラも無事だった！！

「サーラ！ 大丈夫か！？ どこか怪我はないか……？」

「ええ。ありがとう。怪我はないわ。けれど、わたし達の体の様子が少しおかしくなっている事に、2人とも気付いているかしら？」  
体がおかしい？ どういう事だ？ 体が違うっていう事か？

……そう言われると、妹の姿もいつもと違っている事に気づく。

まず頭の頂点にあった、旅をしていた時に精霊からもらい受けた、全ての知己と智恵を聞き逃さないというネコの形をした耳がなくなっていた。

それと妹も同様に、性格上、絶対に着そうにないだらしない男が着てそうなダラツとした服を着ていて、

更にこちらでも今気付いたけど（本当だよ）少し小さかったけれど成長過程であつた控えめで大人しめな胸が、

今度は服の上からでもわかるくらいに、ストーンと、全くといっていいほどなかったのだ。

妹は胸を見られているのに気付いたのか、腕で体を抱くようにして胸を隠し体をくねらせる。

## 妹の推理

「あの……お兄さん、そんなに胸ばかり見ないで（ポツ）……じゃなくて。ええと、話を戻すわ。さつきチラッとその世界の事を調べたのよ。」

それで今の状況をすぐに改善したいので、端的に説明するわ。推測の範囲内なのだけれども、

わたし達は平行世界、パラレルワールドに近い世界の別のわたし達に憑依、いえ、多分こちらの方ね。

この世界の体の保持者と中身が入れ替わったと思うのよ。おそらく今の現状を見る限りじゃわたしはそう思っているの。

多分、魔王と戦っていた時に使われた水晶が原因ね。本当に精神をくらったのかはあつちの、元の世界のわたし達を見ないとわからないけれど、

石も言っていたように『わけのわからない言語をしゃべっていた』と言う話を聞く限りじゃ、入れ替わったと言う事で間違いないと言っても過言ではないわ。

『過言ではない』という理由にはさつきからわたしの説明、いえ、言語ね、

それが全然わからずにばかの子のようにずっと口を開けてぼかんと見ているお兄さんの横にいる子と、

わたし達は何年も経て色んな国を旅してきたのに、今まで一度も見た事もないような道具や装飾品がこの貴族の部屋には見えない、普通のありふれた庶民の部屋の中にいっぱいある、という2つの点もその仮説に真実味を与えているもの。

外の景色を見る限りじゃ、わたし達の世界のどこか辺鄙な島に飛ばされた可能性はないわ。

『遠くまで見える』と言う事はある程度の大きな島であるはずだし、この温度では極端に偏った緯度に位置する場所でもないはず。

それならわたしが知らないはずがない。なのでここは『やはりわたし達の世界ではない』という事。

そして次に、大体同じだけれども、少しの差異がある体。

そんな状態になるには憑依という可能性もあるけれど、憑依の場合、乗り移るにはかなりの準備が必要だし乗り移る対象をかなり熟知しておかないといけない。

そういった暇は全然なかったし、第一、わたし達と同じすがたかたちのした人間を用意する必要はないし、用意なんて出来っこないわ。

それが3人もなんだから天文学的数字じゃないとありえない。

それならさつさとその可能性を排除しないと。

……となるとやはり平行世界、パラレルワールド、いえ、『見知らぬ世界』と言った方がお兄さんにはわかりやすいかしら？

『この世界の自分と入れ替わった』という結論に行き着くの。

その前にまず考え付くのは、単純にわたし達3人が別の世界に飛ばされた、という結論だけれども、

わたし達が単純に違う世界に移ってしまうと、等価交換の法則で世界のバランスがおかしくなってしまう。これはわかるわよね？

なので、それは違うという事になる。じゃあこの世界の人間と体ごと入れ変わったかという事、それも推論だけれども、

わたし達の持つエネルギーが大きくて2つの世界のバランスがおかしくなるので、お互いの世界がこれを拒否したと言う事ね。

それに今言った2つの仮説じゃわたし達の体が違っている事の説明もつかないしね。

だから中身、厳密には精神だけ入れ替わった、という結論に行き着くのよ。

あくまでこれは、今さつきごくわずかの情報を見聞きして考えた結論だけれども、わたしはこの推論を推すわ。

でも、まだ状況はあまりよくわかっていないので、あまり極論に走ってしまわないよう、気をつけないといけないけれどね。

他の可能性もあるかもしれない、と考慮しておくべきだわ。まあざっと簡単にまとめるとそんな所。

2人ともわかったかしら？ 何かわからない事があつたら聞いてちょうだい。

でもちよつと今から、わたしはしないといけない事があるから、少し待っててね。

えーっと、この世界の大气とわたしのマナを掛け合わせて……ぶつぶつ……」

ぽかーん……。

な、何？ 平行世界？ 入れ替わった？ 最初の時点でわかってない。

妹はなんか長編ミステリーの探偵がする最後の推理みたいに、長い持論を披露して

全然、全くと言っていいほど端的ではなかった。

……ええと、それがどうしたって言うんだ？

姉も今、妹が言った、かなりながつたらしい話をあまりよく理解しておらず、首をひねっていた。

妹はその様子を見て、どうやら2人とも自分のした話をよくわかっていない、という事をよくわかったようだ。

「……まあいいわ。現状を把握するまで2人とも喋らないで」

そういうと妹は目を瞑り、聞いた事のない魔法を詠唱し始めた。周りが不思議な光に包まれる。

女の子はその光にただただ驚き、目をチカチカとさせているばかりだ。

そして、

「ホンニヤク・フォン・ヤークツ!!」

ツ!!

妹の魔法を耳にした瞬間、つまっていた耳の奥がすつと抜けたように世界の音が変わった。ような気がした。

「えっ？ なになに？ え？ ホントにみんな何してるの？」

さっきからずっと横の女の子が不安げに、きよろきよろと3人を見ながら喋っている。

しかし今までと違うのは、その女の子の話している事が理解出来ている点だ。

「おお！ この子の声が、」

わかる！ と、感動して声を出そうとしたのだけれど、

「お兄さん、喋らないで、って言ったでしょ？」

ぴしっ、と妹にたしなめられた。

……はい、そうでした。

## 言葉の壁の向こう側

どうやら、さっきの魔法はこの世界と共鳴する類の物のようだった。

サーラは女の子の方を向き、笑顔を振りまきながら話しかける。

「ごめんなさいね。ちよっとしたお遊戯をしていて。あ！ そうだわ！ ちよっと聞きたい事があったの。ねえ、教えてもらえるかしら？」

サーラは微笑を浮かべ、だが、有無を言わずに、今なお状況を掴めていない女の子の腕を引っ張り、部屋から連れ去って行った。

まあ、状況が掴めていないのは、こっちもなんだけれどね。

出て行った2人を見送ってから、姉が俺に目を向ける。

「仕方がない。何がなんだかわけのわからない状況なのだから、しばらくの間、サーラのいうとおりに行動するべきだな」

「そうだね」

姉の提案に同意する。

こういった複雑怪奇な事象は、妹の専門分野だ。

もちはもち屋、精通している者に任せよう。というか俺が手伝おうとすると逆に足を引っ張ってしまう。

サーラと女の子が外に出ている間、姉は妹の言葉を反芻していたのだが、何か思い出したのか、あごに手を当ててじろじろと無遠慮にこちらを見てきた。

「しかし、サーラは耳がなくなっていたようだけれど……んー、リユートは変わらないようだな。何か違った点はあるか？」

？ どういう事なんだろう？ って、ああ、サーラは『体が違う』って言っていたな。俺もどこか体が違うのかな？

「ん。そういえば自分の体は見ていなかったな……うーん……俺は



そこまで特殊な外見じゃなかったし、あんまり変わってない気がするんだけど……」

そう言くと、姉はふーむ、とうなずいて、ようやくじろじろとした視線から解放してくれた。

確かにじろじろ見られると心が落ち着かなくなるな。

サーラが恥ずかしがっていた気持ちが変わったよ。

しかも俺は、ぺったんこになっていた胸を見ていたからなおさらだ。後で謝っておこう。

「あ、そういえば、姉さんは自分の左目が普通になってる事とか、絶対着そうない服を着ているとか、

その……胸が異様に膨らんでいる事とかには、気付いてるの？」

そう言つと姉は、何！？と言つて、まず自分の着ている服に気づいて驚き、

次に男たちの夢と希望が詰まって大きくなったようなけしからん胸をたゆんたゆんと手で揺らして驚き（あふう）

そして服の胸元を引っ張って、直接、中を覗き、本当に大きくなつたのかを確認をして、また驚いていた。（う、うらやましい）

目は……目を調べようとしたけれど、どうすれば自分で確認出来るのかわからないようで（近くに鏡がなかった）頭を抱え、

天井を見ながら、むむむ、と声を出しながら唸っていた。

確かに自分で自分の目は見れないもんね。

しかし、頭を抱えていた姉の頭の上にピカッ！と電球が点つたかと思えば、

ピクッ、と動きが止まり、いきなりこちらに向かってきた。

そんな奇々怪々とした行動原理を働く姉は、やおら俺の頭を両手で掴みそのまま顔を近づけてきた！

「ええっ！いきなり何！？何？どうしたの！？」

さつきから行動が唐突過ぎる。

本当にどうしたんだ？ どこか怪我でもしたの！？

頭を掴んだまま、じいーっと瞳を見つめてくる姉。顔がどんどん距離をつめてくる。

そして、お互いのくちびるとくちびるが、触れそうになった所で

……眉をひそめている姉の動きが止まり、

しかし離れることなく、そのままの態勢で見つめてきた。

（うっ、なんだろう……これは、すごく、その、恥ずかしいです……カァ）

恥ずかしさで目線が定まらない。これはもう、さつきのじろじろという段階を軽く凌駕しているぞ！？

姉は全く気にしていないのかもしれないけれど、こっちはたまったものではない。

そういった、たまったものではない状態が続けている姉が、うーん、と唸りながら、

「たしかに……うん、左目が普通になっているな……どういう事だろう？」

と今だに同じ格好のままつぶやいた。

……！ ああ、自分の目を見るものがないから、俺の瞳で見ようとしたのか！

うーん、発想が姉らしいというか……

「あの、確認できたのなら、その、恥ずかしいから、もう顔を離さない？」

「む。……いや、もう少し、じっくりと見ておきたいな。リユート、動くなよ」

そう言っただけ顔が近づけてきた。

姉の息が頬に当たってこそばゆい。なんだか恥ずかしい……てか、なんで目を閉じるの！？

自分の瞳を見るためじゃなかったの！？

そうして、そのまま更に顔が近づいていって、もう顔が、唇がくっついてしまう！

といった状態になる寸前で、運良く（悪く？）さっきまで部屋の外にいた2人が戻ってきた。

2人の様子を見て、驚く2人。

「ええええ！？ 今度は何をしてるんですか！？ もうさっきみたいに騙されませんかね！？ ていうか離れて下さい！」

女の子がこちらに向かって、素っ頓狂な声を出した。

「ー！ ああ、ごめん（すまない）」

その言葉にわれに返ったのか、ぱつ、と顔を離してくれた姉。

あれだけ顔を近づけていたのに、姉は全く顔色を変えていなかったようだ。

俺の顔は……少し赤くなっていると思う。

そんなリユートたちを見て、妹は不機嫌そうな顔をしていた。

「姉さんの性格からして、状況はなんとなくわかるのだけれども、釈然としないわね……そうね……あとで兄さんに同じ事を……」

ぶつぶつとなにやら不穏な事をつぶやいている妹。

いかん、妹が悪い方向に向かっている。

それを姉がコホン、と咳をして、妹を元の世界に戻した。

「で、何をしていたんだ？」

「え？ いや、なんでもないわ。（ニコツ）さっ、早くご飯を食べるでガッコウに行きましょう！」

にこやかな笑顔を携えながら、そう言うサーラ。

女の子がサーラを見て怪訝な顔をしている。

「?? うーん、なんだかよくわからないけど、流ちゃん、早く用意しないと遅刻だよ。わたし、用意して外で待ってるからね！」

そう言って部屋から出て行く女の子。なんだっただろう？

女の子を見送り、妹の言った聞いた事のない単語を聞こうとする。「ガッコウとは何のことだ？」

姉も同じ事を思ったのか、先に妹に聞いていた。

「ガツコウとは、わたし達が昔所属していた、魔法学園や傭兵養成所みたいな所の一種ね。」

この世界にいた、もう一人のわたし達は、そこに自分の家から通っているわけ。それで、ここがわたし達が住んでいる家」

さり気知らない情報を次々と教えてくれる妹。対して、今の現状に振り回されているだけの俺。情けないが、ありがたい。

さらに、サーラが話し続ける。

「とりあえず、下にわたし達の親がいるそうなので、食事を取りましょう。」

それを食べ終わったら、早くこの趣味の悪い服を着替えて……ガツコウへ行くには、皆同じ服を着るそうよ。

だから……ああ、いっぺんに喋っても2人ともこんがらがっちゃうだけね。

まあ、詳しい話は食事の後にしましょ。あ、それとお兄さんはなるべく喋らないで。ばれるから」

……ひどい言われようだ。しかし大体合っているので言い返せない。それに言い返すと後が怖そうだし。

## 思わぬ再会

3人とも部屋から出る。……ん、3人で歩くには廊下が狭いな。どうやらこの家は2階建てで、今まで2階にいたようだ。

1列になって、バタバタと階段を降りていくと、下から焼いた魚の匂いと、スープのいい香りが漂ってきた。

ぐうー。思わずお腹の音がなってしまう。

食べ物の香りで、こんないい匂いを嗅ぐのは本当に久しぶりだからだ。

魔王の城に近づくにつれて、あまりいい食材が手に入らなかったからなあ。

あの頃は大体毎日、現地で取れた野草や臭い獣肉を調理するか、木の皮と同じくらい硬い保存用のパンばかりだった。

あんな日々が続いていたので、こうしてお腹がなるのは当然だと思う。

昔のさもしい食事風景を思い出しつつ、階段を降り匂いのする部屋に向かう。

そして何気なく食事部屋に入ると、

そこに驚くべき人物がいた。

「あら、3人一緒に降りてきて。めずらしいわね。おはよう。朝から上で、なにを騒いでいたの？」

……信じられない。目を疑った。

姉も妹もその人物に釘付けになる。

なつかしい顔。

なつかしい声。

そして、なつかしい、けれど昔と全く変わっていない、優しい笑顔。

「う、う、う……」

サーラが泣きそうになっていた。

姉さんも。

いや、俺も泣きそうになっている。

そして思い出と一緒にあってポロポロと涙がこぼれるが、3人も我慢することは出来なかった。

「「「お母さんっ！！」「」」

そう叫んで、目の前にいる母親に抱きついた。

みんな、わあわあと泣いている。

なにせもう会えないものだと思っていたのだから。

一斉に抱きつかれた母親は、少し面をくらっていたが、

3人の頭を順々によしよしと撫でて、全員の目から零れ落ちる涙を丁寧に拭いていった。

「あらあら。まあ。どうしたの？　きつと怖い夢でも見たのね。桜ちゃんまで。」

ほらほら、もう、泣かなくてもいいのよ。お母さんがついているんだから！　さあ、朝ごはんを食べましょー

そう言ってみんなの肩をぽんっ！と叩き、明るく振舞う母親。昔と同じ仕草でなぐさめてくれた。あの頃と全く変わっていない。それが嬉しくて3人とも泣いた顔を、涙はまだまだ溢れてくるけれど、すぐに笑顔に変えたのだった。

「ほーら、3人とも、もう泣かないの？　あんまり泣いていると目が腫れちゃってガッコウに行けなくなっちゃうじゃない。」

詩帆ちゃんをずっと玄関で待たせるハメになるわよ」  
そう笑って、3人分の食事を用意する母さん。

「そうね。……グスツ、お兄さんお姉さん。早い所、食事を終わらせましょ」

と、なんで泣かれているのかわかっていない母親の視線に、ようやく気づいたサーラが涙を拭きながら提案した。

鼻をすすり、目を擦りながら席に着く3人。

テーブルには、

麦を蒸したような白い食べ物と、茶色いスープ、焼いた魚、

卵焼き、赤い果実のシロップ漬けの様な物、野草をゆでた物等、

他にも数点並んでいた。

朝からかなり豪華な食事だった。久々の贅沢だ。

「それじゃ、久々に4人そろった所で、みんな仲良く朝ごはんを食べましょうか。いただきます」

母さんが目をつぶり手を合わせた。

「いただきます」

サーラが母さんの仕草を真似て手を合わせた。

っ！ この世界の風習のようだ！ 真似しなきゃ！！

少し遅れて、俺と姉も「いただきます」と間延びしたセリフを口にし、手を合わせる。

母さんはおかしい物でも見たかのようにクスクスと笑い、そして「はい召し上がれ」と言ってくれた。

見た事もない食べ物が多いけれど、おいしそうだし、食べてみるか。

パクツ。

「うまつつつつつ！！！！？」  
「すっぱっつつつつ！！！！？」



## 姉妹のファッションショー

食事も終わり、各人が自分の部屋に戻り、妹の指示で、もう一人の自分が今まで着ていたのもあろう指定の制服に着替えた。

リュートの制服は上下とも黒いシンプルな服装だった。

男の服だしこれといって特に描写すべき点はない。

着替えも早々に済ませ、扉の向こうにいるまだ着替えている2人に声をかけて先に階段を降りた。

やはりどこの世界でも、女性の方が着替えるのに時間がかかるものだろうか？

そうして1階で待っていると、珍しい事に先にサーラが下に降りてきた。

いつもなら几帳面で、服飾品や、装飾の関係で妹が一番時間がかかるものなのだけれども。

「お待たせ。お姉さんが着替えるのを渋って……いえ、着替える事自体は別に時間はかからなかったのだけれど、

説得するのに時間がかかってしまつて……あ、お兄さん、どう？（クルッ）この服、似合っているかしら？」

きらきらきらーん（効果音）

妹の背後に、ダイヤモンドみたいな形の光がピカピカといくつも光り輝いて見えるよ（演出効果）

魔術師特有の今までの地味な真っ黒い服とは違い、初めて見る新鮮な姿の妹が目の前にいる！

おお！ すばらしい！ これは……新しい妹の誕生だ（意味不明）  
今までずっと一緒にいたけれど、また違った一面を垣間見たというか……とてもいい。

あらためて妹の着ている制服を見る。

上は白色を基調とした長袖になっており、袖と襟が紺色になっている。

そして妹の胸には青色のリボンが結ばれていて、それがまたアクセントにもなっていて、大変、大変よい。

下は袖や襟と同じ紺色をしたスカートになっていて、スカートの丈はかなり短い。

ひざの上まで伸ばした黒いハイソックスと、スカートの間に見える綺麗な太ももが眩しいし、

スカートの中身も少し動けば見えてしまいそうだ。

ああ！ 妹！？ そんな、くるりと回られたら、その、なんというか目のやり場に困る。

全体的に白と紺の2色構成になっており、そこにワンポイントのリボンが足されているシンプルなデザイン。

しかし、その計算つくされたようなコントラストがエクセレントだ。

……はっ！ なんで俺は、こんなに熱く制服について語っているんだ！？

妹は、自分の制服姿を見て、ドギマギしているリユートの顔を見て満足したのか、

回ったりポーズを取るのをやめて、2階にいるまだ降りてこない姉に声をかけた。

「どうするのー。お姉さんー。そのまま降りてこないつもりなのー？」

姉は、着替え終えているらしいが、まだ降りてこない。

何度か妹が声をかけるが、わかっているのだが……と、はっきりしない返事ばかり。

仕方ない、俺も声をかけるか。

「姉さん！ 早くしないとサーラと2人で行っちゃうよー！」

こうやって脅せば降りてくるだろう。

案の定、すぐに、しかし牛歩戦術みたいにゆっくりと、姉は決心した面持ちで1歩1歩、階段を踏みしめながら下に降りてきた。

「す、すまない。こういった服をあまり着る事がなくてな……」

確かに元の世界でスカートというものを全く履いてなかったな。だから降りてこなかったのか。

スカートの丈はそこまで短くないが、それでもスースーするのが気になるのか、裾を抑えながら姉は顔を真っ赤にし、とても恥ずかしがっている。

そうして、2人の前にしずしずと立つ。

（スカートの丈で肌の露出は勝っているし、お姉さんはガチガチになっているから、

お兄さんに全然アピール出来ていない。ふふ、この勝負、もらったわね！）

とサーラは余裕そうにしていた……のだが、思わぬ誤算があった。「リユート……そんなに、じろじろと、私の制服姿を見ないで。こっちは恥ずかしくて……仕方がないんだから」

恥ずかしさのあまり、いつものしっかりした言葉遣いが影を潜め、話し方が若干女の子らしくなっている。

そして、耳たぶまでほんのりと赤くなっているのを見られないように顔を伏せ、スカートを掴んでいる手を、ギュツ、と強く握り締めた。

「あ、ああ。ごめん！ 姉さん！」

こちらにも慌てて顔を逸らす。

（か、かわいい！ これはホントに、あの姉か！？）

そう。今の姉は、普段まったく想像も出来ない仕草や言葉遣いを使っており、

そして別人のようにしおらしい表情をして恥ずかしがっている。

そんな姉の貴重な姿を見て、リユートの顔もだんだんと姉と同じように赤くなっていく。

（あれ？）

2人の様子がおかしい事に、余裕の表情を浮かべていた妹もようやく気づいたようだ。

（なっ！ しまった！ 服だけじゃなくて、はじらう表情や仕草もお兄さんの採点基準に含まれていたなんて！！ ぬかったわ！）

なんの勝負なのかはわからないが、悔しそうにする妹。

まあ、俺の得点はどちら余裕で満点だったけれどもね。

……ていうか時間がないんじゃないかなかったっけ？

そんなこんなで、制服のお披露目も無事（？）終わり、3人とも外に出たのであった。

## 勇者は演技下手

扉を開けると玄関先で、さっきの少女、詩帆（母が言っていた）が待っていた。

さつきも見たけれど、少し小柄で可愛らしい子だ。姉や妹に比べ、背が低い。

まあ2人が同年代に比べ、背が高いのもあるけれど。

リュートに気付いたのか少し赤みがあったセミロングの髪を揺らし、こちらをくりくりつとしたつぶらな目で見てきた。

そうした仕草が、守ってあげたくなるオーラを出していた。

さっそく合流する。姉・妹・彼女は、それぞれリボンの色が違うけれども（妹は赤で詩帆は黄色だった。階級が違うのかな？）

他の部分は同じ、つまり3人は同じ施設なのだろう。

俺はどうなるんだろう。男女別で違うのだろうか？

俺たちの世界は男は男、女は女で分けられていたけれども……

しかし、妹の助けがないと、こういった状況を乗り切れる自信がない。同じ施設でいれるよう少しでも祈っておこう。

「なにやら騒々しかったね」

少し待ちくたびれたのか、詩帆が欠伸をしながらリュートに話しかけてきた。

確かに、勝手が違うので手間取ったのだけど『中身が違うから』

とは言えまい。

「いや……まあ、なんでもないよ」

と曖昧な返事をするリュート。

「ふーん。あんまりゆっくりしていると遅刻するよ！ 早くガッコウに行こつ！」

詩帆はあまり気にしていのか、歩き始めた。

なぜ曖昧な、差し当たりのない返事をするのかというと、先ほど妹から、

「状況がわからない今、むやみに自分達の立場をさらすのは危険だと思うの。」

出来る限り、別の世界から来たという事を隠しておきましょう。

お兄さんも自分が勇者だとか言わないでね。

頭がおかしいと思われるから。2人もわかる通り、この世界は私たちの世界とは全然違う。

だから、言葉が違っていたように、風習・習慣も違う所があると思うので、知らず知らず、無意識の内にバレる可能性があるわ。

……さっきもありえない位すっぱい食べ物が食卓に並べられていたし……

なので、状況が把握出来るまで、出来るだけ目立つ行動は差し控えるようにして」

と、言われた（特にリユートは釘を刺された）からだ。

なので、妹の指示通り目立たないよう、彼女の半歩後ろをついていくような形で歩き始める。

なんと言っても、行き先すらわかっていないので、彼女についていく他ない。

ちなみに今の隊列はリユートと詩帆、その後ろに妹・姉の2列横隊になっている。

本当はこういった事態に強い、妹が詩帆に色々聞いた方がいいのだけれども出かける段になってから妹がこんな事を言ってきたのだった。

「今朝、私があの人と部屋の外で話しかけた時、かなり驚かれたの。おそらくだけど、私とあの人との普段の関係は、そこまで深くないと思うのよ。」

だから出来る限り、朝わざわざ起こしにいく程の、仲のよろしい

お兄さんが話さない」

との事。（そう言っていた妹はなぜか不機嫌だった）

「わかったよ。出来る限り自然に、サーラのために有益な情報を手してくるよ！」

ビシッ！ と気合をいれる俺。

そこへ姉が一言。

「ああ、がんばれ！ しかしリュート、気をつける。おまえは演技が、とても下手だ」

……という事で演技開始。あたりさわりのない会話から入るか。

「やあ、おはよう。いい天気だね！」

既に一緒に歩いているのに、また挨拶から始めるリュート。

さっそくやらかしたリュートに、後ろで妹が頭を押さえているが、

「そうだね。あー、今日の体育は嫌だね。わたし、走るの苦手だし」

と、詩帆から普通に返答が帰ってきた。

「そうだよなー。走るのには雲ひとつない、いい天気なんだけどな」

これまた、変な返事を返すリュート。

体もかなりギクシャクとしている。滑稽な事に、同じ方の手足を出して歩いている。

（はぁ……お兄さん、普段通りにやればいいのに。無理して張り切っちゃうんだから）

（ああ、あいつは演技をしようとすればするほど、空回りするからな）

後ろの方で、リュートの一挙手一投足をハラハラと見守っている2人。

しかし、

「ホントだー。あつ、あそこにパンみたいな雲が浮かんでる。」

……そうだ！ ねえ、今日は外で一緒にご飯食べよっか？ ……

…たまには2人つきりでさ？」

「ああ。そうしようか。今朝、母さんの作った料理はおいしかったからな。ハハハ」

「流ちゃんのお母さんってホント料理上手だからね。わたしもあれくらい出来たらな」

「へえ。じゃあ、料理するんだ」

「いつつも食べてるじゃない！ はあーあ、色んな理由をつけて私のお弁当食べるの上手なんだからー。それを忘れるなんてひどいよー」

ぽかぽか。

「あつ、いや、ごめん。そういうつもりじゃなかったんだけど……」  
「感想を言ってくれるのは嬉しいけどさ……あ、友子から借りてた本返すの忘れてた！」

「本？」

「そう、先週の金曜日だね、友子ちゃんが、これ、すっごく面白いから！ って貸してくれたの。」

今日、感想を言うついでに返すつもりだったんだけど、どうしよう……」

「まあ1日くらい遅れたって構わないさ」

「そっか……うん！ そうだよね！」

……なぜか上手く会話が運んでいる。

（やった！ 思いの他、上手くいつてるぞ。自信が出てきた！）

リユートは1人、調子をよくしているが、後ろの2人は話が飛びすぎていて、何がなんだかよくわかっていない。

（あれで、よく会話が成立しているわね……）

（ああ、波長が同じなんだろう）  
呆れられていた。

そして、リユートの言った「1日くらい遅れてもいいだろう」という言葉で思い出したのか、詩帆がこんな事を聞いてきた。

「そつえば、流ちゃん。シुकダイやった？」

「シुकダイ？」



ってなんだ？　ここに来て知らない単語が出てきた。

えっと、どうする？　どうする！？　俺！？　と、さっきまでの勢いはどこへやら。

少しのアクシデントにも弱いのか、途端に慌てだすリユート。

普通の演技もさる事ながら、こういう所も妹に指摘される所以なのだろう。

どう返答すべきか考えているリユートの無言を、詩帆は否定と捉えたのか、頬を膨らませた。

「もしかして、またやってないの？　もう私、ノート見せないからね！　ほら、今日やってないと、うんたらかんたらで、うんたらかんたらなんだからね！」

次々と聞きなれない単語を出される。

「ああ、まあ……」

曖昧に返事をするけれど、うう、なんの事かわからない……どう答えればいいんだ！？

もう既に、キャパシティオーバーでリユートの頭から煙が出ている。

フリーズした頭を再起動させようとした時、コホン、と後ろから姉の咳をする音が。

ちらり、とその方向を見ると、妹が指で、はい、のサイン。

っ！　ありがとう、2人とも！！　助け舟を出してくれたんだね！

「あ、ああ！　もちろん！！　もちろん、ちゃんと任務はこなしたさ！」

自信満々にそう答えたのだけれども、彼女の方かというと「？？」という表情を顔いっぱいにつけていた。

「？　……まあ、出来てるならいいんだけどね。それでさ、こないだ買った本がね、とっても面白くてね。流ちゃんも読んでほしいんだけど、うんたらかんたら……」

ふう……額にかいた汗をぬぐう。どうやら通じたらしいが、多分にニュアンスが違っていたらしい。

しかし、なんとか持ちこたえたようだ。彼女は、昨日読んだ本の内容について語る事に夢中になっていて、リユートの怪しい言動に疑問を持っているような雰囲気はなかった。

はぁ、これは心臓に悪いな。モンスターとの戦いなんかは、お手の物なんだけれどさ。

背中に冷や汗がたらたらと出ているよ。やはりこういった芝居は苦手だ。

こんな思いをしたのは昔、王城に無断で侵入した時以来だ……

…あの時もこんな感じだったな……

その後、寿命が縮まる思いをしながらも、詩帆からこの世界の色々な情報を聞き出した。

まあ、聞き出したといっても、判断をするのは聞き耳を立てている後ろの妹だ。

物には適所適材があるので、今回はあまり前に出ないでおこう。

結局、シुकダイが最後までなにかわからなかったのだけでも、聞くに昨晚の内に終わらせていなければならぬものだった。今の俺にはどうする事も出来ない。

頼む。異世界にいた自分。シुकダイ（宿命の題的な発想をしている）を終わらせていてくれっ！

## 魔物襲来

そういった感じで話している事、約10分。

少しずつだけでも会話もスムーズに進むようになり、このまま無事に目的地に到着するかと思われた。

しかし、その楽観的な予測は見事に崩れ去る。

ブオオオーーーーンッ！！

遙か遠くで、後ろの方聞いた事のないモンスターのような、低い唸り声が響いてきた！

っ！ 敵か！？ 見れば、大きな物体が、こちらへと一直線に向かってきている！

全身を鎧で覆った巨大な物体が、馬よりも速い速度で走っているなんて！？

なんだ、あれは！？ 見たこともないモンスターだ！ 獰猛そうでかなり強そうに見える！

そして、こういった予想はだいたい当たる。間違いない、あれは強敵だ！！

このままいけば、10秒も経たないうちに激突してしまう！  
すぐさま後ろにいる2人を見やる。当然、どちらも敵に気付いていた。

「リユート、サーラ。どうやら、あの敵は、中で操っている者がいるようだ。」

あんなに獰猛な猛獣を操れるのは、相当経験のある手だてだ！  
気をつける！」

「今のわたし達の装備では、あれに攻撃されるとひとたまりもないわ。」

2人とも気をつけて！ わたしは後衛で術式の用意をします」

「各自、今すぐに警戒！ 私は先駆ける。向こうが敵意を見せた瞬間に向かえ撃つぞ！」

アスカが敵の方へと向かった。その後の司令塔はリユートに一任されるのはいつも通り。

「俺は、彼女の保護とサーラを守る！ 姉さんは最前線で盾に！ 出来るなら陽動を！ サーラは合図で雷撃の準備！！ 魔法レベルは……3で！」

「了解！！」

アスカは車とこちらを挟むかのような形になるように移動。

サーラはリユートと詩帆の後ろで目を瞑り、集中して詠唱準備。

リユートは詩帆を守る。陣形は細長いひし形になった。敵に気付いてからこの間、5秒。

どんな状況に陥ってもすぐに対応出来るかが、生死を分けてきた。なので、今まで数々の死線くぐってきた3人の連携は極めて洗練されていた。

詩帆は、さつきから、突然みんなが大声でなにやら叫び始め、顔にでっかい！？マークをつけている。

しかし、あれは一撃で殺傷する能力を持っていそうだから余所見をしている暇なんてない！

彼女を早く安全な場所へ導こう。

ぷにゅっ。

咄嗟の事で気が付かなかったけれど、俺の手が詩帆の胸に当たってしまった。

もみもみ……………訂正、掴んでしまっていたようだ。

決して、わざとではない事をここに誓っておく。

しかし、さつきプリンが食べたくなってきただけで、弾力のあるゼリーもいいような気がしてきた。

敵の前だというのに、そのやらかい感触に少し思考が鈍ってしまったリユート。

詩帆も、リユートの手が胸に当たっている事に気付いたようだ。

「えっ！？　ちょ、ちよつとっ！？　流ちゃん！？　何してっ…

…」

リユートの手を離そうと、詩帆がもがいている先で、前の方で敵の様子をつぶさに見ていた姉が、なにかに気付いたようだ。

（むっ！　中にいる騎兵がこちらを確認して手を挙げた！　魔法を使う気か！？）

……確信は得られないが状況を鑑みると、これは撃退すべきだ！）  
アス力が、人差し指で作戦決行の合図を出す。

それを見たリユートが、目を閉じ詠唱中のサーラに命令する。

「サーラ！」

「了解！」

はあああ。

「ピイカ・チューーーーーーッ！！」

サーラの周りにバチバチツと高電圧の電気が走り、そして、その何万ボルトかの電流が巨大な猛獣へと一直線に向かっていく！

ボンッ！！！！　当たった！　効果はばつぐんだ！

「きゃっつっ！！」

目の前のエレクトリックな光景に驚き、耳を塞いで目をつむる詩帆。

猛獣は鈍いうめき声を上げて、動きをとめた。

（？？　動かなくなっただが、全く負傷しているようには見えないな……）

敵は、無防備な格好のまま動かなくなったが畏かもしれない。気をつけなければ。

「現状待機！　各自、警戒を怠るな！」

アス力は、待て、の合図である片手を上げつつ視線は敵の方向を見たまま。

リユートとアス力同様、サーラもまた不審に思っているのか、すでに次の魔法を放つ準備をしている。

隣で震えている詩帆が、不安げな表情でリュートの裾をひっぱりながら、話しかけてきた。

「ねえ……リュートちゃん。急にピカツて光って、すごい音がしたよね？ あの車、なんかプスプスしてるし……」

「ああ。そのようだな」

彼女の顔を見ずに、そう答える。

「……おかしい……魔法レベルが……」

後ろのほうでは、サーラが何やら考えている。

そんなサーラをよそに、様子を見ていた詩帆が何かを発見したのか、敵の方へと指差した。

「あつ！ あの車って先生のだ！ ていうか、先生、大丈夫なのかな！？」

「……先生？」「」

3人の声がハモる。

その時、猛獣を操っていたであろう人物が、頭を掻きながら中から出てきた。

「もー、なんなの！？ 変な音がしたと思ったら急に止まっちゃってさ。このポンコツ突然動かなくなったよ！

そんな所までデロリアンの真似をしなくてもいいのにつ！

ああ、もう遅刻しそうだっていうのにー！ ……ま、今日は理由が出来たから、いっか！」

んなはははは……！ と腕を腰にあてて快活に笑う女の声が朝の道路に響き渡った。

## ガツコウとは？

話から察するに、ここは魔法学園や傭兵養成所を合わせた、総合訓練施設のようらしい。

訓練施設の建物にしてはとても大きく、高い爵位を持つ貴族並の敷地を有していた。

ランクは能力関係なく年齢別になっていて、3人とも別々のグループだそうだ。

姉・妹と別れる事になったが、詩帆とは一緒のグループとの事。なので、30人ちよつとが所属する部屋まで一緒に行くことにした。

この施設には、部屋の中にいくつもの机があり、それが規則正しく配列されている。

同じような簡素な部屋がかなりあり、しかし所要人数のわりに各部屋は小さくて狭い。

そんな風に『ガツコウ』について分析していると、

さつきまで戦闘の処理の為にせわしなく動き回っていた詩帆が「疲れたーっ」と盛大なため息を吐いた。

「はーっ！ 今日なんだが、朝からバタバタとして大変だったね。」

あの後、動かなくなった銀色の物体をその場にいた全員で押して、どうにか学校の駐車場まで持っていったのだ（2人には悪いことをしてしまった）

早とちりで壊してしまったが、あれはこちらの世界でいう馬車のようなものらしい。

先生は元々遅刻しそうだった、というよりか既に遅刻していた、先生方の朝礼会議に欠席せざるおえなくなってしまったのだった。

ガラッ！！

詩帆が扉を開けた。ここが2人の所属する部屋らしい。

「よ、ご兩人。おはようさん！」

教室に入ると、ぴょん、と後ろからリュートと詩帆の間に入り、声をかけてきた人物がいた。

あれ？ この女の子には見覚えがあった。

魔王城がある島に渡るまで、色々と食料や装備品の援助をしてくれた商人（彼女曰く、何でも屋だそうだが）の女の子だ。

黒に一滴青を落としたような色の、綺麗な髪を後ろで束ね（この髪型はポニーテールっていうんだよ！ と昔、彼女に教えてもらった）

少し猫目で、いつも明るい顔を浮かべているのは同じなのだが、あつちの世界の彼女とは服装が全然違う。

向こうの彼女は自分の3倍はあるうか、というリュックをいつも背負っていて頭にはターバンを巻き、服装はどんな所でも暮らしていけそうな程の重装備だった。

今の彼女は、詩帆と同じ軽装な制服に身を包んでいる。その体格を見る限りじゃ、あのリュックはとても背負えそうにない。なので多分、彼女はあの子とは違う……と思う。それに向こうの彼女ならば、久々に会った俺との再会を祝し派手に喜んでくれているはずだからだ。

そういう訳で、この子はこっちの世界の子だろう。憶測で話していた妹の言葉に信憑性が増してきた。

……そういえば、あの子は今なにをしているのだろう。

そんな事を1人考えているリュートを尻目に、詩帆と女の子がいさつをかわす。

「ご兩人って、もう……おはよう、友子。あ、先生、ちょっと遅れちゃってて、今日はいつもよりも、もうちょっと来るのが遅そうかな」



「ふーん。まつ、HRなんていつも何にもしてないから、いーんだけどね。……あれ？　つかさ、流斗。あんた、なんか今日いつもと違うくない？　雰囲気？　顔とか？」

ぎくっ！　一言も何も言っていない内から、いきなり指摘された。

話す前から気づかれるなんて！！？　なぜ！！？

「そうなんだよねー。朝からな〜んか、いつもと、ちよ〜と違うような……」

「そ、そんな事はないさ！　さ、早く席につこう！」

首をひねっている2人に対して、慌てて否定をするリュート。

このまま追求されるとマズいので、話を打ち切ろうと近くの席に座るのだが、

「おい、そこは違う席だろ……んー？　おやおや、どうしたのかな流斗君？　君は少し動揺しすぎだぞー？　にやにや」

……墓穴を掘ったようだ。どうやら座る席は、事前に決まっているようだ。

からかいがいがあると思ったのか、肩を組んできて、耳元で囁き始めてきた。

「今朝、詩帆に着替えを見られたりとかしたのか？　あつ、キスで起こされたとかか？　それとも姉さんにされたのか？　んん！？　もしかして桜ちゃん！？」

元の世界と同じく明るいやつだ……だからこそ、あの世界では貴重な存在だったけれど。

友子のおかげで、慌てふためいていた頭も少し落ち着く。

「あー、はいはい。かまをかけるな。そういつた事はないから。で、席は？」

「席？　……あそこだろ。なーに忘れてんだか。寝ぼけてんのか？　ま、あんたはいつもボケツとしてるけどもね。まあ、いつか……あ、幼〜」

友子は何を言ってた？　と少し眉をひそめたけれど、次なる獲

物へと狙いを定めたようでリユートを標的からはずした。

その隙に、リユートは言われた席へと避難する。やれやれ。

座った席は部屋の上から、俯瞰で見れば、やや左で後ろの方だ。

窓から見える景色は見晴らしがよく、遠くの方まで見渡せた。

遠くの、目で見える範囲まで建物があるという事は、ここ一帯は平和らしい。

近くには綺麗に整備された、運動に利用する為のものだろう、小さな平野が見えた。

どうやら、この世界は比較的治安がいいように見受けられた。これだけで判断を下すには、少し早いが。

さっきまでいた教室の入り口では、詩帆と友子がまだしゃべっている。

というよりか、友子が詩帆をからかっているようだ。詩帆が顔を真っ赤にしている。

この2人の関係はいつもこうなのだろう。

……では、俺は？

（まあ、俺の事だから、多少、演技がおかしくなってもしょうがない。目立たずにいておこう。こういった事はサーラが頼りになる。妹に任せるか）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7531u/>

---

勇者がこちらの世界に飛ばされました。

2011年7月22日03時16分発行